

## 福利論における快樂説の擁護

卑俗性批判への応答

笹瀬介(東京大学)

本発表の目的は、卑俗性批判と呼ばれる批判に応答することを通して、福利論における快樂説を擁護することである。卑俗性批判という名称自体は成田(2021)に由来するが、この批判は伝統的には「豚の哲学」批判という形で快樂説に提起されてきたものであり、快樂説に対する主要かつ古典的な批判の1つである。

福利論においては、D. パーフィットによって議論状況が整理されて以降、快樂説(hedonism)が1つの有力な立場として唱えられている。快樂説の標準的な形態(default hedonism、以下 DH)は、(1)すべての快樂が、そして快樂のみがある人 P にとって良い、という主張にコミットするものである。

本発表が扱う卑俗性批判には2つの形態が存在するが、そのうちの1つの形態——これを批判 A とする——は、(1)における「すべての快樂が」という部分に着目する。批判 A によれば、快樂には卑俗な快樂と卑俗でない快樂が存在し、卑俗な快樂はある人 P にとって良くない。それゆえ、(1)は偽であるので、DHは誤りであるということになる。

他方で、卑俗性批判のもう1つの形態——これを批判 B とする——は次のような、より具体的な快樂説を批判の標的とする。それは、素朴な快樂説(simple hedonism、以下 SH)とも呼ぶべき立場であり、SH は DH の主張(1)に加えて、(2)快樂がある人 P にとってどれくらい良いかは、快樂の強さと持続時間のみによって決まる、という主張にコミットする。SH は、代表的には J. ベンサムが唱えているような快樂説であり、快樂の量のみによって快樂の価値が決定されると考える量的快樂説(quantitative hedonism)である。これに対し、批判 B は、卑俗な快樂のある人 P にとっての良さとは、それらの快樂の強さと持続時間が等しい場合でも異なりうる旨を指摘する。SH は、快樂の量にしか着目しないため、卑俗な快樂と卑俗でない快樂の違いが量ではなく質に求められる限りにおいて、両者の価値の違いを認めることができない。したがって、もし批判 B の指摘が正しければ、(2)が偽であることになるので、SHは誤りである。

本発表の目的は、これら2つの形態の卑俗性批判に対し、快樂説の側から応答を試みることである。応答の方法としては、「居直り」と「部分的修正」の2つを用いる。「居直り」とは、快樂説自体には手を加えずに批判に応答することである。「居直り」による応答は、批判 A および批判 B の両方に対して行う。「居直り」では思考実験などを用いることによって、批判者の側が依拠している直観の信頼性に対して疑義を唱えることで応答を試みる。他方で、「部分的修正」とは、快樂説自体に手を加えることで批判に応答することを指す。「部分的修正」による応答は、批判 B に対してのみ行う。「部分的修正」による応答では、J. S. ミルが行ったように、快樂説に快樂の質の違いを導入する。そのように修正された快樂説は質的快樂説(qualitative hedonism、以下 QH)と呼ばれるが、QH は、2つの快樂について、両者の強さと持続時間が同じでも、質の点で違いがあれば、それらの価値の違いを認めることができる。このようにして、批判者の側の直観に適合的な結論を導出するものに快樂説を修正するのが「部分的修正」による応答である。

しかし、「部分的修正」による応答において持ち出されるミル流の QH に対しては、G. E. ムーアによるよく知られた批判が存在する。それは、QH は不整合に陥るといふ批判である。この批判は、次の3つの命題を前提として成立しているといふことができる。すなわち、(i)快樂の質は快樂の外在的特徴であるという前提、および(ii)あるものの内在的価値(intrinsic value)はそのものの外在的特徴によっては左右され得ないという前提、そして(iii)あるもののある人 P にとっての良さは内在的価値であるという前提である。

快樂説論者の F. フェルドマンは、このうちの(i)を否定することで、ムーアの批判に応答している。Feldman (2004)では、快樂の本性についての見解として命題的態度説を採用して快樂の質を快樂の内在的特徴として捉えることで上の(i)を否定し、それによって、ムーアの批判を回避しながら快樂の質の違いを快樂説の枠内で論じつつ、卑俗性批判に応答する快樂説の形態を提示している。

しかし、この応答には問題点、というよりは不十分な点が存在する。仮に命題的態度説を採用することによってムーアの批判に応答することができたとしても、快樂の本性についての他の見解、例えば感覚説や態度対象説を採用する快樂説については(i)が成り立つので、これらの見解を採用する快樂説は依然としてムーアの批判から逃れることができず、よってそれらの快樂説は少なくとも「部分的修正」による仕方では卑俗性批判に応答できないことになる。そうするとわれわれは、「居直り」による応答が失敗する限りにおいて、卑俗性批判とムーアの批判によって、快樂の本性に関していかなる見解を採用するかという点についての理論的選択肢を制限されることとなる。これは、福利の理論として快樂説を擁護する上では望ましくない。そこで、本発表では、ムーアの批判が前提としている命題のうち、ムーアの価値論的な見解、すなわち(ii)または(iii)を否定することを通して批判に応答することを試みる。もし、この応答が成功すれば、われわれは、快樂の本性についていかなる見解を採用するかという点について理論的選択肢を制限されることなく、「部分的修正」によって卑俗性批判に応答できることになる。

まとめると、本発表で行うことは以下である。まず、本発表が応答する卑俗性批判の2つの形態を定式化する。そして、批判 A に対して「居直り」による応答を行う。次いで、批判 B に対して「居直り」と「部分的修正」による応答を行う。「部分的修正」において持ち出される QH に対してはムーアの批判が存在するので、この批判に対して上述の(ii)または(iii)を否定することによって応答を試みる。

### 参考文献

- Derek, P. (1984). *Reasons and Persons*. Oxford University Press.
- Feldman, F. (2004). *Pleasure and the Good Life*. Oxford University Press.
- Fletcher, G. (2016). *The Philosophy of Well-being*. Routledge.
- Mill, J. S. (1871). *Utilitarianism*. Longmans, Green, Reader, and Dyer. (関口正司訳. (2021). 『功利主義』. 岩波文庫.)
- Moore, G. E. (1903[2000]). *Principia Ethica*. Cambridge University Press.
- Rønnow-Rasmussen, Toni. (2011). *Personal Value*. Oxford University Press.
- 成田和信. (2021). 『幸福をめぐる哲学』. 勁草書房.